アジアフォトコンテストを通じて考えたこと

亜細亜大学では、2021年から高校生の写真作品を対象とした「アジアフォトコンテスト」を実施してきた。今年もすばらしい写真がたくさん送られてきた(受賞作は、下記URLを参照)。

僭越ながら、私は委員長を引き受けることになった。初年度の2021年はコロナ禍で渡航規制が厳しいなかでのスタートとなった。だから、応募しやすいようにテーマを「日本国内で自分なりのアジアを見つけてみよう」とした。それに応えるように、高校生は一所懸命に、日本のなかのアジアを見つけようとしてくれた。2年目も、まだポストコロナには至らなかった。制限があったものの、やはりすばらしい作品が送られてきた。

そして、3年目の今年は渡航規制も解除されたこともあって、海外での写真が増えた。送られて来た作品からは、カメラ(スマホ？)を持って、異国の地を旅する高校生の姿が想像された。香港の町並み、カンボジアの学校、韓国の商店街…　いい作品ばかりだ。審査は難航した。

他方、国内の写真も引き続き多かった。たとえば、大阪にあるコリアタウンや町中のアジア各国料理店など、たしかに経済のグローバル化のなかで「日本のなかのアジア」を見かける機会も増えてきた。そして1回目から多かったのが日本の伝統に目も向けた写真で、たとえば寺院、お祭り、着物、古い町並み、そして自然だ。「そうなんだ。日本もアジアなのだ」と思い知らされた。日本とアジアを切り分けるという理由は年々少なくなっている。

それだけではない。高校生たちは、日本の伝統文化や自然のなかに、アジア地域の共通性を見つけ出そうとしているようにみえる。しかも、それは、変化が激しい時代のなかで、自分を見失わないように足下を確認するという、よりよい未来志向するための作業のようにも思えた。

2023年は、日本ASEAN友好協力50周年である。さまざまなイベントや議論が交わされた。そのなかでよく使われる言葉の一つに「共創」がある。お互いに知恵を出し合いながら新しい時代を切り開いていきましょうというものである。もっともな考え方である。これは、SDGs(持続可能な開発目標)の17番目の目標である「パートナーシップで目標を達成しよう」にも通じる考え方だ。

ただし、一見当たり前に聞こえる「共創」の実現は簡単ではない。まず、お互いに長所・短所をきちんと理解し合い、対話・議論を継続するという地道な作業が必要になる。そして、この作業は、政治家・官僚、経営者だけでなくすべての人に求められる。その前提として、異なる価値観を容認し、共栄・共存していくことが必要だ。

でも、それだけではなかろう。地域の底流にある共通点を見出し、共有していくことも必要であろう。「アジアは一つ」などとはいわないが、アジアに共通するものはあるに違いない。それは、何か。しっかり考えてみたい。高校生の感性の高い作品をみて、そう思った。

(https://www.asia-u.ac.jp/contribution/learning_opportunity/photocon/result3.html)

アジア研究所教授・大泉啓一郎

❋研究所だより❋

今年度の第2回アジア研究所セミナー「アジア・ウォッチャー」を以下のとおり開催しました。

日時　12月9日(土)　14時から15時30分まで
講師　川上桃子氏 JETROアジア経済研究所
　　地域研究センター上席主任調査研究員
テーマ　「中台関係の四半世紀と24年台湾総統選挙」
開催形式　オンライン講座（Zoomウェビナー）

アジア研究に関するより良い成果発信に向けて、ただいま仕込み中です。来年度の研究プロジェクトを学内研究者に向けて募集中であり、年明けには学内のアジア研究者の交流・懇親を図るための「アジア研究サロン」を開催する予定です。

アジア各国の政治、経済、社会はめまぐるしく動いており、わが国にも少なからぬ影響を与えるものと思われます。これまでの研究蓄積を踏まえ、アジア各国の情勢について的確かつタイムリーな情報提供に努めてまいります。皆様のご意見・ご要望を歓迎いたします。

(koza@asia-u.ac.jp)